

思われる白い微細な粒が路面に残ることを教わった。自然からの教示と捉えた。

【 註 】

- 1 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997 『上野原遺跡』
- 2 古代交通研究会など『古代交通研究』
- 3 鹿児島県教育委員会など『歴史の道調査報告書』
- 4 鹿児島県教育委員会 1982 『山崎B遺跡』
- 5 南日本新聞社『南日本新聞』
- 6 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003 『中原遺跡』
- 7 南日本新聞社『南日本新聞』
- 8 日本考古学協会 1998 『日本考古学年報49』
- 9 日本考古学協会 1997 『日本考古学年報48』
- 10 埋文友の会講演レジュメ『発掘が語る道の歴史』
- 11 鹿児島県考古学会『鹿児島県考古学会秋季大会資料集』
- 12 調査担当の実測図面による
- 13 鹿児島県教育委員会 1981 『加栗山遺跡』
- 14 指宿市考古博物館・時遊館 COCCO はしむれ 2000
『水迫遺跡からのメッセージ日本集落の源流を探る』
- 15 枕崎市教育委員会 1995 『二本松遺跡』
- 16 鹿児島県教育委員会 1981 『加治屋園遺跡』
- 17 加世田市教育委員会 1994 『梶ノ原遺跡』
- 18 NHK 2002年9月28日放送『地球に乾杯』巨石を上げて名を残せミャンマー山の民と謎の儀式』より
- 19 福井勝義 1995 『焼畑の民族誌紀行 ラオスの事例』
『季刊民族学』72号
- 20 吉田集而 1992 『吸酒管とモミガラ』『季刊民族学』
61号
- 21 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002 『上野原遺跡』

【補 足】

- 1 「道跡は、谷筋からだけ検出されるのではなく、尾根筋もあるはず」との考え方について
 - ① 遺跡で確認できる道跡は谷筋であり、尾根筋の道は確認できる可能性は低いと考えられる。
 - ② その理由は、尾根筋の道は、尾根のほぼ中央を通るものであるが、遺跡の発掘調査では、そのような狭隘な尾根を大々的に調査することはほとんどないことによる。
 - ③ また、たとえ遺跡の調査で偶然に尾根筋を見つけたにしても、重機による表土の除去のため、辛うじて残存していた道の痕跡は削りとられる可能性が極めて大きいと考えられる。
 - ④ その他、台地上の遺跡本体から尾根筋に移行する場所は、地形的には強い傾斜が始まる地点と考えられ、そのような場所の調査は崩土や土砂流失および流水の急激な流下などの可能性があることなどから、保護のために土手として残すことがほとんどで、危険性を無視してまで調査することは皆無に等しい。
 - ⑤ これらの理由から、尾根筋の検出はほぼ絶望的と考えられる。
 - ⑥ 谷筋は、以上のような尾根筋の調査よりも、格段に検出がたやすいものと思量される。
- 2 道幅について
 - ① 一人が通行できる道幅は、最低で両足の幅と考えられるが、両足をこすり合わせるような歩行を継続的に行うことは不可能と考えられる。
 - ② そうすると、最低限の通行可能な道幅は両足がついている部位、すなわち腰の幅と考えられる。
 - ③ つまり30～50cm程度ということになる。これは、細い道といえる。
 - ④ 遺跡の発掘調査で検出されるのは、硬化した部分であるため、20～30cm程度の道跡として認識されることがほとんどと考えられる。
 - ⑤ その次の一人が安定して通行できる道幅は、人が行きと考えられる。

- ⑥ つまり、60cm～1m程度ということになる。これは、小さな道といえる。
- ⑦ 遺跡の調査では、40～80cm程度の道跡として認識されることが多いと考えられる。
- ⑧ 集落間に普遍的に発達する道幅は、二人が行き合っても、なお余裕のある状態と考えられる。
- ⑨ つまり、1～2m程度ということになる。これは、中位の道といえる。
- ⑩ 遺跡の調査では、1m程度の道跡として認識されると考えられる。
- ⑪ それ以上の道幅のあるものは、大きい道と認識されようが、実際の調査では、ひよっとすると広場として捉えられる可能性も考えられる。